

二一、人生觀

エリゼ・ルクリュエの人生觀を知るには、彼の最後の名著『人間と地球』(L'Homme et la terre) 筆者はさきに『地人論』と名づけまた『世界文化地史大系』と名ずけて第一卷を譯出した)に就て検討することが最捷徑であり、また必要でもある。蓋し彼の懷抱する宇宙觀、人生社會觀等あらゆる思想は、この書に於て集大成されているからである。彼の無政府主義的社會思想の如きも、この基礎觀念を知つて後、始めてよく諒解し得るのである。

『人間と地球』によれば、彼は人生の無常を感じてしかも悲觀厭世に陥いらす、一種の生物進化を信じつつ、しかもダーウィン説に盲從せず、自ら透徹せる一見識を備えて、萬物の生活を洞察して居る。彼は人類の歴史的起原を多元となし、諸生物の枝狀的分化説よりは寧ろ並行的發達を信じ、又、『人類に繼續的の進歩があつた事を證明すべき何物も無い』と、説いている。更に曰く『一般の説にも關らず、頭蓋骨の容積は猿パレオリチツク人類の時代以來、些かも増加しては居ないであろう。化

石頭蓋骨の大多數は、其の容量に於いて、現代人の頭蓋骨の平均容量に勝るのである。』彼がダ
アギンヤスペンサアの進化説に盲従しない點はマルクシストと其の根本思想に於いて大差あるこ
とを證明するものと言えよう。

私は茲に『人間と地球』の如き全部三四千頁に達する大書の全般を紹介することは出来ない。
唯だ人生觀に關係する所だけを簡略に紹介する爲に、同書第六卷の最後の一章『進歩論』(五十頁
の長論文)の抄譯を拙著『歴史哲學序論』より轉載して置く。

絶對的の意味に於いては、「進歩」の語は何の意義をも持たない。なぜなら、世界は無限であ
つて、その無際無邊の中にあつては、人は常に最始と最後とより同様に遠方にいるものだからで
ある。社會の運行はその構成分子たる個人の行動に歸すべきであるが、數年にしてその全生涯を
終了する様な人間各自に對して、一體如何なる事を進歩と決定すべきであるか？ 電光石火の如
き身に何の進歩ぞや！

されば、「進歩」の思想はなお非常に局限したる意味に於て之を解釋せねばならぬ。世間一般に
用いられるこの語の意味は、歴史家ギボンが解釋した處と同様である。彼は「世界開闢以來、各

世紀に於て、眞實の富と、幸福と、科學と、それから多分人間の徳義をも、常に増加しなお増加
する」ことを承認した。道徳的進化の點に於て疑うべき點のある此定義は、再び近代著作家に依
つて、或は改訂せられ、或は擴張、或は縮少せられて、採用せられた。で、進歩の語が、普通の
思想に於て、有史以來の人類の一般的改善を意味することは常に變りがない。けれども、現代の
人類が經過したと同様な進化が、必然的に他の世紀の地上生活にも存在すると説くことは警戒せ
ねばならぬ。吾々の地球の地質學的時代に關して頗る眞實らしき假定説がある。その説によ
ると、吾々の夏と冬の氣候の轉換に應合し、且つ之を非常に大きくした、大時代轉換があるとい
う。此學説は頗る信すべきである。幾千或は幾百萬年、幾百萬世紀に亘る一大往來は、非常に對
照の異つた時代を繼起せしめ、前後互に異つた生命の進化を現出せしめるであらう。新しい氷河
時代が英國やスカンデナヴィヤを再び氷のマンントを以て被い、吾等の美術館や圖書館がその大霜
枯の爲に破壊される時、その「巨大な冬」の時代に於て、現在の人類は如何に成行くであらうか？
或は兩極は同時に冷却すまいし、また人間は徐々にその新境遇に適應し、現在の文明の寶庫を暖
國に運搬して以て生き延びることが出來よう、と希望し得るか？ しかしながら、若しその冷却
が一般的であるならば、全生命の源たる太陽熱の減少と、吾等の貯藏精力の漸次的消盡とが、善

き意味に於ける耕作の發達や眞實の進歩と同時に起ると言うことは有り得べきである。既に現時に於てさえ、彼の氷河時代に次げる尋常なる地球乾燥の結果が、中央亞細亞の諸地方に疑う可らざる退歩状態を來させたことは明かである。河川沼湖の涸渴と、侵入砂丘の並列とは、諸市や、諸文明や、諸國民其ものを消滅せしめた。都市や村落は變じて砂漠となつた。人間は自然力の敵に抵抗し得なかつた。

進歩の意義如何は別として、先ず疑を容れざる一點がある様に思われる。それは、數時代に於て、幾人かの人物が、全世界の全時代の一般人中に或る輪廓に於て斬然頭角を現わしたということである。或は聰明に於て、或は強力な勞作に於て、或は深遠な仁愛に於て、或は道義功德に於て、或は藝術的感情に於て、或は又全然異なつた性資、技能に於て、完全にして凌駕すべからざる典型を成す處の二十人許りの人物がある。希臘の歴史は殊にその大典型を示すのであるが、その他の民族も之を持つていたことはその神話や傳説によつて能く之を察することが出来る。誰か釋迦牟尼より善良、フイヂャスよりも藝術家、アルシメエドよりも發明家、マルク・オオレルよりも賢者だ、と自慢し得るものがあるか？ 若し今三千年以來進歩というものが存在するとせば、その進歩は、曾て數人に保留されたこの種の發現の一層廣き擴充と、その天才の頭腦の最善

なる社會的利用とを以て、成立するであらう。

世の大思想家中には、かかる制限を進歩の意義に加えることを同意せず、人類の一般的状态に眞實の改善があり得るといふことを否定する人々もある。彼等に従えば、進歩の印象は純然たる一種の幻影であつて、全く各自個人的の價値しか無いものである。大多數の人々は、變化の事實を、自分の生物段階上に占むる特殊地位を標準とする進歩（近づくこと）又は退歩（遠ざかること）の思想と混同する。裸體で自由に行動する立派な野蠻人に遭遇する宣教師達は、之に長着や胴着を被せ、靴や帽子を與え、聖書や教書やを持たせ、英語又はラテン語で詩篇を朗讀することを教え、それで彼等を進歩せしめたと信ずる。

x x x

識見高き人にして絶對的に進歩を否定し、殊に、改善の方向に於ける繼續的進化の説をも全然否定する者が尠くない。假えばランケ(Ranke)の如きは史學の大家であるが、歴史各時代は、各自其の特異なる性質を有し、各時代、各民族に従つて、豫期しない特殊生活を發揮する所の多趣の傾向に於て表現されると見る。此思想に従えば、世界は一種の繪畫館となるであらう。敬神家たる彼は曰く、若し進歩と言うことがあるならば、時代から時代へと改良の保證ある人間は「直

接神に依據する」ということは無くなるであろう。何となれば、神は各時代を同一價值を有するものとみそなわす故に。このランケの意見は十八世紀以來よく聞かされた説に反するものであるが、却て今やギユイヨオ (Guyau) の主張は之を肯定する。ギユイヨオの考えに従えば、「進歩の思想は宗教的思想と反對のものである。」

人類進歩の思想の大部分は、地質學研究の事實に基くものである。即ち單純生物より複雑生物に發達して、最後に現われた人間が、言語に依つて、自由自在にその思想を發表することを得、火によつて自然を變形する力を得た、という事實に基くものである。しかるに、もつと狭い範圍、換言すれば諸國民に依つて書かれた歴史に就て考ふる時は、一般的の進歩という事には、其の様な明證が存在しない。多くの厭世的な人々は、人類は唯だ一方に得て他方に失い、一方に興つて他方に衰えて轉々するのみで、決して進歩するものではない、と考ふる。最も樂天的な社會學者等が、人間の無限の進歩の名に於て、佛蘭西革命を準備していた際に、他の著作家は、遠方の民族の單純な生活に心酔せしめられた遠征者の物語に動かされて、原始生活に歸れと説いた。「自然に還れ」とはジャン・ジャックの叫びであつたが、斯くの如く「共和及び人權」の宣言に反する勸告が、此の時代の思想や言語中に存在したということは如何にも不思議な位であつた。革命

家等は、羅馬やスバルタの世紀に還ると同時に、有史以前の諸部落民の單純にして幸福であつた時代に還えらうと欲したのである。

今日は、この様な「自然に還れ」の運動が、ルソオの時代よりは、もつと本氣に行われる。なぜなら、全人類を包容するに至つた現在の社會は、從來進歩的文明人が久しく隔離していた異民族と、最も親密な方法を以て同化しようとするのである。

多くの旅行者、航海者の物語は、諸種の未開人部落の生活を傳えたが、その中には、非常に高い相互扶助、相互愛の理想を實現したものがあつた。例えば、フィリップ群島中の二島に住するエタ民族の如きはその一である。白人種が彼等に對して總ゆる要求をしたに係わらず此「小黑人」達はその迫害者に對してなご懇懇にして優しくあつた。しかしこの人種の高き道徳が表示されるのは殊に彼等同僚間に於てであつた。部落の全員は皆兄弟と感じ、病人や、小兒や、老人は、全き優しさを以て看護され、何人も權力を行使せず、唯た人は老人の前に、其の高齡と經驗とに對する當然の尊敬を表する爲に自ら蹲くのである。』

大司教イノケンチ (Inokenti) (Veriannov) という名で知られた) はアレウト島 (北米西北沿海にあり) 民と共に十年間生活した人であるが、そのアレウト人に就いて曰く「私達の共同生

活の間、曾て唯一句の粗暴な語も彼等の口からは發せられなかつた』彼等に吾々の祈願語を教える必要があるか？ 彼等は吾々よりも遙かに優れている。』

ワリス(Wallace)はその著「Malay archipelago」中に次の如く言つて居る。『若し社會的理想が、吾等の知力、徳力、體力の適當に均衡ある發達によつて實現される綜合意思と個人の自由との調和にあるならば……文明の程度の低い處に於て却てその完全に近い状態を見るのは驚くべきではないか？、私は久しい間、南米及び極東の未開人の村落内に生活したが、彼等はその住民の自由に發表する輿論の外に法律も裁判所も持たない。この諸部落に於ては、各人はその隣人の權利を注意深く尊重し、この規則に違反することは、決してないと言われないが、極めて稀である。殆ど完全なる平等が、この諸部落に行われている。……其處には勿論、富を集積し利益の紛争を醸す處の分業法は行われず、執拗な競争も生存の爲の闘争も行われない。』若し吾々の民衆全體に就て言えば、吾々は到底是等未開人に優越する杯と己惚れることは出来ない云々』

しかしながら、この博物學、社會學の大家が、アマゾンヤマレイ群島の住民に就いて言われた事は、之を一般化し、之を諸大陸や諸島嶼の住民全體に適用することは出来ない。例えばボルネオ島の食人住民の如き、或は前に西歐人の羨望する所となり、その後、殘忍殺伐となつた、美し

いタイチ島民の如き、これである。タイチ人がこの如く變化したのは、これは進歩の方向に發達する代りに、退歩したものであるか、或はこの大洋上の小世界に鎖されたる此小國民の社會生活に、この進退兩運動が輻輳したものであるか？

とにかく、近代社會がその先行社會よりも特に優越したりと主張し得る點は、單にその構成要素が甚だ複雑になつたという事のみである。即ち近代社會は、從來併存した異質の組織を順次に同化して複雑なる組織を形成するのである。しかしながら、又他方に於て、この廣大なる社會は單純化される。即ちこの近代社會は凡そ總ての時代の總ての國の思想と勞動との一切の收穫物の受託者となつて、人類の結合を實現しようとする。

吾々の解釋する幸福とは、單に個人的な快樂では無い。勿論、「各人自らその幸福の固有の製造者だ」という意味から云えば、それは個人的である。けれども、それが全人類に擴充されなければ、眞實で、深遠で、完全だとは云えない。又、悲しみや、災難や、病氣や、死そのものを避けることが出来るという様なことが幸福なのでは無くて、自分達が了解する事業に對し、又その結果が知れている方法を探つて、互に結合した人間が人類全體を確かに善良なる方向に赴か

しめることが出来る、ということが幸福なのである。個人的、或は社會的の、生活の或る舞臺が幸福を成立するのでは無い。幸福とは、人が自己の欲する一定の目的に向つて進むという意識にある。吾等の起原、吾等の現在、吾等の近き目的、吾等の永遠の理想を達観し體現して、地球そのものと一體となり、又、人類一體の意識を確かりと握り、人類や動物や植物やの各自の生活に適する様にその環境を分配し整理し、吾等の庭園即ち地球を耕作し、吾等を繞圍する陸と海と大氣とを整頓する。すなわち此の如くにして進歩は始めて行われるのである。

以上はルクリニ著『人間と地球』の最後の一章『進歩論』の抄譯である。この進歩の線に沿つてのみ社會改造の事業も眞の價値があり、道徳的に意義あるものとなる。

二二、投票は墮落の助成

代議政治に關しては一時社會運動家、殊に無政府主義者の間に議論があつた。歴史的に見れば、英國チャーチストの運動のように、普通選舉制獲得運動を以て、最大の解放運動と考えられた時代もあつた。實際に選舉權並びに被選舉權が一般人に普遍化されれば、政治的經濟的不公平は除去せられるものと考えられたことは、投票權が制限せられた時代に於ては些か意義が存したと言へる。

ルクリニの代議制に對する思考にも時代に依つて大なる變化がある。これは極めて自然な變遷であつて、ルクリニの眞摯な性質が能く現われている。前にも述べたが、ルクリニは一八七一年のバリコムミンに際しては最初極力普通選舉制に依て國事を決せんことを主張した。その以前に於ても、彼は議會政治によつて社會主義革命が成就されるものと信じて、他人にも之を説いてきた。しかるにそれから十餘年の經驗を積んだ一八八五年には、クロボトキンの『一叛逆者の言

葉』の序文に於て彼は既に之を否定するようになり、一八九七年には『投票は墮落である』と斷言するに至つた。即ち同年四月彼が和蘭の同志ファン・デル・フォー (Van der Voo) に送つた書簡中に次の如き言葉がある。

『投票の問題に關しては、私は他の諸行動に對すると同様に言う。即ちその行動其のものは問題では無い。寧ろ其の動機や其の周圍の状況や人間との關係に就て研究せねばならぬ。或る場合に於ては、無政府主義者中に於ても、之を正當と見なし、又は賛成することさえ有り得る。けれどもこの様な特殊な場合が屢々あり得るとは考えられない。私が立會つた總ての選挙に於て、選挙人は無意味不條理に激昂し、選良達はその與えられた特權に依つて又その周圍の惡牽制惡誘惑に依つて容易に墮落腐敗して了うのを見た。又私は見た、哀れむべき人間は外貌に依つて眞實を胡麻化され易いことを。一人の候補者が皆の思想をも代表するものとされ、旗色そのものが意思、行動そのものと見える。凡そ此等のものは常に行動を反らして了う處の純粹の錯覺に過ぎない。そう、私は君の引用した言葉を喜んで反覆する『投票、それは墮落である』
彼は議會政治を最初から悲觀したのではない。彼は親切なる實驗の後に、實に代議政治を否定するに至つたのである。苟も良心ある正直な者は、誰も眞面目に彼に耳傾けるであらう。

エリゼ・ルクリユが選挙投票の問題に就て同志ジャン・グラヴ (J. Grave) に書き送つた手紙が、一八八五年十月十一日發行の『叛逆者』に挿入せられた。その書翰は一層明白に投票に關する彼の意見を表示している故、左にその全文を譯出する。

仲間よ

君は、投票者でも候補者でもない、一人の善意の持主に、選挙權の實行について如何なる考えを持つてゐるかを説明せんことを要求する。

君が僕に許してくれた期限は大分短い、選挙投票の問題に就ては、可なり明確な信念を持つてゐるので、僕は君に答えるべきことを數語に纏めることができる。

投票する。それは棄權することだ。一人或は數人を短い又は長い期間に向つて指名することは、それは自己の主權を放棄することである。君が王座に又は一の椅子に選んだ候補者は、それが絶對的の王にならうと、王國の一小部分を身に付けた憲法的貴族又は單なる代表者にならうと、それは君の優越者であるだらう。君は法律に超越する人間を指名するのだ。なぜなら彼

等の任務は法律を作り、君等を服従せしむるにある。

投票する。それは愚弄されることだ。それは、君と同様な人間が、唯だ振鈴の一言で、突如として全智全能の徳を授かるというのを信じるのだ。君の代表者は、マッチのことから軍艦のこと、樹木の害出のことから紅色・黒色人種の撲滅のことまで、あらゆる事に就て立法せねばならないので、ただその爲事が大きいことだけで、彼等の智慧は素晴らしく見えるであらう。歴史はその反對の事實を君に教える。権力は常に狂亂し、お喋りは常に愚劣になる。統治議會に於ては凡劣が宿命的に優勝する。

投票する。それは裏切を喚起することだ。勿論、投票者はその投票を與える人々の正直さを信ずるに相違ない——そして最初の内はそれが正しかろう。候補者がまだ初戀に焔えている間は。しかし毎日その翌日がある。環境が變われば、それと共に人間も變わる。今日、候補者は君の前に腰をひくくして頼む、恐らく餘りにひくすぎる位い。翌日、彼はそりかへる、恐らく餘りに高すぎるくらい。彼は投票を懇願した、彼は君に命令を與えるであらう。職長になつた勞働者は、主人の寵遇を受ける以前と同様にあり得るか？ 勝氣な民主主義者も、銀行家が彼をその事務室に招致することを厭う時や、王家の小使が會見の榮を賜る時には、これに屈服

すべきことを學ばないか？ こうした立法體の空氣というものは呼吸に害がある。君は代表者を腐泥の中に送るのだ。彼等がそこから腐敗して出て來たからと驚くな。

だから棄權（投票のこと……石川）するな。君の運命を、當然無力な人間どもに、未來の裏切どもに、托してはならない。投票するな！ 君の利益を他に依托する代りに、君自らこれを防護せよ。將來の行動方式を提議すべく代弁者を頼む代りに自ら行動せよ！ 善意の人には好機會が少くない。自分の行動の責任を他に投ずる、それは勇氣を欠くことなのだ。

同志諸君の健康を心から祈る。

エリゼ・ルクリュ

この一文はバリのアナキスト團體によつて選舉廣告の形で貼り出された。英國に於ても英譯され「フリーダム」(英國アナキスト機關紙)に掲載された。

一二三、革命の歴史的原則

歴史上に於ける革命的闘争に就てエリゼ・ルクリュは次の如く言っている。

『歴史家が立證する諸事象中の第一の種類が吾々に示すところは、個人間及び社會間に於ける發展の不平等の結果として、如何に總ての人間團體が——原始的自然状態に存する民族は例外として——單に相違せるのみならず、寧ろ利害と傾向との相反する、そして何時の危急の時期に於ても明白に敵對にさえ立つたところの階級または閥に殆ど分裂するかということである。かくの如きは、風光や、氣候や、また益々混亂する諸事象の錯綜やが決定するところの無限の多趣性を有し、且つ多くの形態の下に、世界の總ての地方にて觀察される諸々の事實の概観なのである。

『社會體分裂の必然的結果たる第二の綜合的事實は、個人と個人との、社會と社會との均衡が破れて、絶えず靜止の中軸を中にして動搖することである。即ち、正義の侵害は常に復讐に訴えるものである。それから顛動が絶えない。命令する人々は何時までも支配者であらうと欲し、しか

るに服従者は自由を回復する爲に努力し、そして、自分達の飛躍の勢いに驅られて、自分等の利益の爲に政權を樹立しようと試みる。かくて内亂は、對外戰や、鎮壓や、破壊やを隨伴し混入し、連續せる紛糾となり、闘争の各要素の進出如何に従つて様々に終局する。或は被壓迫者が抵抗力を消盡して服従し、生命を成すところの發意力を持たなくなつて徐々に死滅して行き、或は自由人の要求が勝を占め、そして事件の混亂の中に、眞の革命、換言すれば、環境の諸状態の明白な理解力や、個人的發意の精力やに基ずく政治的、經濟的、社會的制度の變革が勃發される。』(註)

ルクリュに於ては、革命闘争の原因は『個人間または社會間に於ける、發展(開發)の不平等』に基くのである。その闘争の陣營は階級であることもあり、また『閥』であることもある。階級とは社會組織の機構内の部分を言うのであるが、閥は個人或は特殊小集團を中心としてその周圍に結成する協力團體である。ルクリュの見るところでは、社會が、こうした陣營に分れるのは危急の時機に於てである。平常は種々様な階級又は閥に分れて紛糾するが、革命的危局が切迫して來る時には、保守派と革命派とが對戦して様々な中間派は或は何れにか附屬し、或は曖昧にして時期を待つのである。そしてその兩陣營は單に利害の相異によつてのみ分れるのでなく、傾向を異にするのである。この傾向とは極めて廣い意味である。君主的傾向、共和的傾向、

獨裁的傾向、民主的傾向等様々な傾向がある。それから又、その闘争は様々な要因に影響せられて、無限の多趣性を以て現われるのである。(註)ルクリュ『地人論』(拙譯)六一七頁

更に最も重要な點は、その動搖が『正義の侵害』から始まることである。かくの如く、その闘争は辯證法的に起るものでないと同時に、その結末もまた決して必然的に型通りに行われるものではない。それは『闘争の各要素の進出如何に従つて様々に終局する』のである。或は叛逆者が意思力を消耗して死滅することもあり『或は自由人の要求が勝を占め、…個人的發意の精力に基づく…革命が勃發される』

次に更に歴史上に於ける個人の價値に就てルクリュに聽こう。『總ゆる時代と總ゆる國に於ける人間の研究は…諸民族生存の如何なる進化も個人的努力によらなければ、創造されるものではないといふことを吾々に證明する。國民の態度を變更するであろう諸事業に参加したり、諸思想を弘通したりする爲の有意的行動と變ずべく運命づけられるところの環境の強迫的衝撃を探究するには社會の第一要素たる人間そのものの中に於てしなければならぬ。社會の均衡の不安定は、ただ個人の自由な擴充に對して負わせる束縛からでなければ起らないものである。自由社會は、第一の基礎的細胞たる各個人——それは、やがて集合して、自分の好むところに従つて、變易的

な人類の他の細胞に結合する——に完全な發展を齎らすような自由に依つて成立する。諸社會が價値を増し品位を高めるのは、個人のこうした初發的進展と自由とに正比例に於てである。即ちこの世を建設しまた改造するところの創造的意思が生れるのは人間からである。』(ルクリュ著地人論『七頁』)

ルクリュの考えるところでは、或る個人が或る環境の強迫的衝撃を受けると、その個人は自らの個性に基いて獨立の有意的行動を起し、或は事業を企圖し、或は思想を宣傳して、民衆の態度に變更を來らす。そして、その強迫的衝撃を起す主要なものは『社會の均衡の不安定』であるがその不安定即ち社會の病理的現象は、自由の束縛から生起するのである。

しからばこうした均衡の不安定や、正義の侵害や、階級間或は閥間の確執は何によつて生ずるか。ルクリュはこれを發展の不平等に歸する。それは單に歴史現象の解釋としては、宜しい。ルクリュは勿論ここで、それ丈を略説したのである。しかしながら、この歴史現象を動かすところの人間性の研究としては、なお一步深く人間心理の世界に履み入れなくてはならない。それは人間の『惡』の問題である。寧ろ『迷』の問題である。人間が生理的に具有する錯覺、心理的に持つ幻影、の問題である。それは別に獨立した研究に待たなくてはならないから、ここには省く。